

日本列島のふるえ音と吸着音と膨れっ面^{*}

高山 林太郎

キーワード：ふるえ音 吸着音 膨れっ面 間投音 日本語 朝鮮語 中国語

要旨

本稿はふるえ音や吸着音や膨れっ面に関する先行研究を引用した上で、日本列島と周辺 2 地域における間投音「[ɸu], [!!!!...], [i], [pɪ:]」やオノマトペに関する筆者の調査結果を示し、それらが慣習的に用いられている事を確認する。

1. はじめに

本稿は高山 (2013) の改訂増補版であるが、高山 (2013) のうち文法理論的な側面だけを抽出したものを高山 (2017) として既に発表済みである。そこで本稿では高山 (2013) のうち間投音等に関する調査資料 (本稿で増補する) とその考察を記す。

^{*} 筆者による本研究の調査にご協力下さった各地の調査者・話者の皆様に、厚く御礼申し上げます。その芳名を右に記します (敬称略, 「氏名 (西暦)」は生年): 朝鮮族・漢民族対象の調査 (2011 年 11~翌 1 月) の調査者として、順に崔梅花 (当時 20 代女性), 王海波 (当時 20 代男性)。東京都文京区での調査 (2012 年 5 月) に、関根理香 (1965, 青森市出身)。岩手県盛岡市での調査 (2013 年 3 月) に、中谷真也 (1929)。東京都東村山市での調査 (2012 年 5~7 月) に、嶋田憲三 (1938), 野崎征吉 (1938), 金子光一 (1938), 江藤又次 (1923), 小山昇 (1935), 川合萬次郎 (1938), 浅見勇 (1936)。岡山市南区妹尾での調査 (2010 年 11 月~2012 年 5 月) に、今元完 (1932), 佐藤猪左男 (1930), 城口寛治 (1932), 光吉秀太郎 (1928), 藤井静雄 (1946), 佐藤文男 (1930), 安井博 (1948, 庭瀬出身), 矢吹忠志 (1927), 匿名女性 (1943), 佐藤昇 (1947), 佐藤忠磨 (1932), 坂本ふみ子 (1951)。岡山市南区箕島での調査 (2011 年 5 月~翌 5 月) に、佐藤育子 (1935), 小銭幸雄 (1934), 伊丹英男 (1934), 小銭正好 (1941), 匿名男性 (1932), 草深登代子 (1941), 林慶子 (1940)。広島県尾道市での調査 (2012 年 2~7 月) に、匿名女性 (1936), 池田康子 (1933)。高知市での調査 (2013 年 2 月) に、植田益實 (1927, 土佐市出身), 下原瑞恵 (1946, 上町出身), 中岡恒子 (1932, 春野町出身), 根木勢介 (1949, 安芸市出身)。鹿児島県上甕島里での調査 (2012 年 7~9 月) に、平嶺廣教 (1948), 小川豊博 (1950)。鹿児島県沖永良部島国頭での調査 (2012 年 9 月) に、川上忠志 (1943)。東京都文京区での東京 23 区内出身者の調査 (2014 年 5 月) に、石井愰二郎 (1935), 長谷部光延 (1939), 森美智子 (1937), 中澤辰男 (1940), 匿名男性 (1939), 佐保高司 (1947), 小甲幸晴 (1942), 生津朝子 (1943), 小嶋鍊一 (1935), 鎌倉精一 (1943), 清時子 (1947), 大貫昭夫 (1936), 大橋秀夫 (1949), 小甲初枝 (1946), 服部和永 (1936), 坂巻三登 (1943), 伊藤敏 (1944), 伴明雄 (1936), 安西讓 (1939), 平出一貫 (1941), 匿名男性 (1937), 匿名女性 (1945), 川井安一 (1940), 川井東子 (1940), 小森逸人 (1940), 匿名男性 (1942), 匿名男性 (1936), 匿名男性 (1943), 匿名男性 (1945), 松山暁子 (1948)。岡山市北区での岡山市出身者の調査 (2014 年 6~7 月) に、源陸勝美 (1937), 芳原良徳 (1945), 塩飽暉倭 (1935), 山崎泰雄 (1932), 西川亮一 (1936, 赤磐市出身), 赤木悦子 (1940), 安井浩友 (1941), 細川伸五 (1948), 匿名男性 (1944), 山吹俊彦 (1944), 溝口悟 (1951), 吉田一宏 (1945), 佐野弘 (1946), 志茂節子 (1944), 田中博 (1947), 奥山雅章 (1938), 出射勝美 (1944), 友長健一 (1935), 前田健一 (1950), 平賀義行 (1947), 福島大雅 (1931), 匿名女性 (1941), 土井達成 (1948), 茂崎隼人 (1943), 板見敏夫 (1935), 和気隆一 (1944), 正保英代 (1938), 国定政志 (1936), 木本孚 (1947), 田中和子 (1948)。高知市丸池町での高知市出身者の調査 (2014 年 7 月) に、田中修二 (1949), 安岡信江 (1940), 安岡章夫 (1938), 北村聰幸 (1945), 北代八重 (1947), 森田等 (1940), 徳弘良文 (1938), 井関通夫 (1951, 高岡郡東津野村出身), 八松理恵子 (1948), 濱田純子 (1951, 土佐市出身), 匿名男性 (1948), 柳川美代子 (1947), 田村久美子 (1946), 横田國正 (1933), 西原重夫 (1950), 長尾正紘 (1944), 大崎龍秀 (1941), 大田明美 (1948, 土佐郡土佐町出身), 匿名女性 (1953), 野口明男 (1941), 天野恵美 (1942), 川村満生 (1931), 匿名女性 (1942), 匿名女性 (1938), 広瀬晶子 (1946), 中町絹代 (1933), 西村楠志 (1929, 室戸市室津出身), 坂野耕一 (1946), 匿名女性 (1947), 安部時子 (1938, 本人は高知市だが両親は長岡郡出身), 下原瑞恵 (1946, 上述と同一人物)。以上, 129 名。

2, 3 節では高山 (2013) の日本などの間投音の調査結果にその後の新たな調査結果を加えた資料 (ふるえ音の「ブー」, 吸着音の「チェツェツェツェツェツ…」と「チェツ」, 膨れっ面¹⁾) を示し, 考察する。なお高山 (2011) は岡山市南区箕島・妹尾においてパ・バ行子音の自由変音として軽いふるえ音が強調などの際に現れる事を報告しているが, 本稿で主に扱う両唇ふるえ音は「強く長く明瞭なもの」である。また, 岡山市南区箕島と高知県の一部に分布するふるえ音の「プー・アプー」と, 本州に分布する感動詞「アップ」, 伝承童謡「にらめっこ」の歌詞「アップアップ」の関係について考察する。

4 節では岡山市南区妹尾周辺の舌尖ふるえ音 (ラ行子音の自由変音), 両唇ふるえ音 (パ行・バ行子音の自由変音), 口蓋垂ふるえ音 (ハ行子音の自由変音およびハ行子音と対立する音) の地理的分布の記述と歴史の考察を行う。

2. 資料と考察 (1) ——世界の先行研究 (両唇ふるえ音と吸着音) ——

先行研究を見る。Australia の Yir-Yoront 語の ideophone を記述した Alpher (1994: 163) によれば, オノマトペで例外的に有声/無声の両唇・舌尖ふるえ音を長く発する形がある。服部 (1984: 73) に「両唇のふるえ音【略】は, 【略】ドイツその他では, 温さ・寒さ・嫌悪軽蔑, などを表わす間投音として, あるいは馬に対する「とまれ」の合図【略】として【略】用いられるという。ロシヤ人やタタール人が馬を止めるときに発する音は, [p] の破裂後に直ちに長い有声の両唇ふるえ音が続く。同じく, ひどく寒いときに発する音は, 有声両唇摩擦音で始まって有声両唇ふるえ音へと移る」とある。

Ladefoged (2005: 170) に “English speakers use clicks as noises that are like signals, such as the sound that novelists write as ‘tsk, tsk’, used to express disapproval.” とある。服部 (1984: 117) に「[t] の閉鎖と同じように形作られる吸着音は [t*] で表わす。英語で tut (tk, t'ck, t'cht) と書かれる立腹・不快・悼みなどを表わす間投音は普通これである。日本語でいまいましさを表わす「チェツ」は [tʃ*] のような吸着破裂音であることが多い。蒙古人は弱い [tʃ*] を五六回連続げざまに発して首を左右に振りながら感嘆の気持を表わすことがある。硬口蓋音の [c*], 硬口蓋側面音の [cʃ*], 舌尖側面音の [tʃ*] などは, 馬を進めるのに用いられるという」とある。

他方で, 「恣意性の高い語彙の音声」としての両唇ふるえ音や吸着音も存在する。両唇ふるえ音の地点に偏りは無いが, 吸着音の地点はアフリカに限られる。

両唇ふるえ音は普通 [p, b] と書くが本稿では [p, b] と書く。Ayotte (2003: 31-33) によれば,

¹⁾ 高山 (2017: 379-380) より引用する: 「日本には, 有声両唇ふるえ音を長く発して「(2,3 歳までの幼児を) 可愛がる・あやす・注意を引く」間投音 (所謂「唇ブルブル」) や, 前寄りの吸着音を連発して「(餌をやる際など, 鳥獣を) 呼ぶ・注意を引く」間投音 (所謂「ねず鳴き」; 「雀の子のねずなきするにをどり来る」『枕草子』より。現代でも古語として言及される) が存在する。【中略】1 回だけ前寄りの吸着音を発して「怒り・苛立ち・不平」を表わす間投音 (所謂「舌打ち」) もある。「唇ブルブル, ねず鳴き, 舌打ち」の 3 つの間投音は, 日本列島とその周辺地域に広く分布している (高山 2013)」。『日本語大辞典第二版』11 巻 p.796 によると, 「ふくれっつら」の意味は「頬をふくらました顔つき。不機嫌な顔つき。怒ってむっとした顔つき。また, その顔。ふくれづら。ふくれ顔。」とあり, 1777 年が初例とある。「ふくれっつら」と同じ意味とされる「ふくれづら」は 1704 年が初例, 「ふくれ顔」は 1722 年が初例とある。

アフリカはカメルーンの Ngwe 語 Njoagwi 方言では「灰」を [abə], 「犬」を [mby], 「山羊」を [mbə], 「丸」を [lɛbɛa] と言う。Ladefoged (2005: 165-166) と付属 CD によれば、パプアニューギニアの本島のすぐ北にある小島で話される Kele では「顔」を [ʷbulim], 同島の Titan では「鼠」を [ʷbulei] と言う(筆者注; 後続母音は [u] に限定されるか)。また、舌尖ふるえ音の音節 [ʷri, ʷra] が存在する(筆者注; ふるえ音の前鼻音は必須か)。Ladefoged (2005) 付属 CD によれば、ブラジルとボリビアの国境地帯で話されている Oro Win では「小さな男の子」を [tʷum], 「私は丸太の上を歩く」を [tʷotʷokimɛn] と言う。[t] との同時調音になる(筆者注; 後続母音は [u, o] の 2 種類か)。Brown (2005: 563-564) によれば、スマトラ島で話される Nias 語 Seletan 方言には /mb/[β] があり, /m/, /b/ と対立する。また、舌尖ふるえ音 /tʷ[r] があって /l/ と対立する。但し /mb/ は発話先頭以外の位置では、ゆっくりとした発音で [ʷβ] となることがあり、一部の方言では発話先頭でも [ʷβ] になることがある。またしばしば [β] で発音される。後続する母音に制限は無く、その点で稀少である。

Ladefoged (2005: 170) には “Zulu is probably better known for the clicking sounds that it has than for its laterals. All of us can make clicks, but they occur as regular speech sounds only in languages spoken in Africa.” とある。服部 (1984: 117) には「Bushman 語, Hottentot 語, Bantu-Ngoni 語 (Zulu, Xhosa, Swazi) などでは吸着音が言語音として用いられ、肺臓からの呼気によって調音される普通の音と並んで語中に現われ、音韻的には一つの音素に該当する」とある。

3. 資料と考察 (2) ——筆者によるもの(両唇ふるえ音と歯茎吸着音と膨れっ面) ——

次に、日本の方言話者や、中国からの留学生を対象に調査し、特殊な両唇ふるえ音・吸着音・膨れっ面の実態を報告する。方法は、日本人は筆者が直接、調査票や個別の質問等によって、主に高年層を対象に調査した。中国人は、言語研究を専門とする留学生 2 名に調査 (2011 年 11 月～翌 1 月) を委託し、主に若年層を対象に複数人数を調査し、その回答をデータとした。

3.1. 朝鮮族と漢民族の資料 (両唇ふるえ音と歯茎吸着音と膨れっ面)

中国吉林省延辺朝鮮族自治州和龍市当時 20 代女性 (調査者① (朝鮮族); 調査者①が同世代の他の朝鮮族 4 名にも聞いて情報を寄せた) によると、親の世代までの習慣として、主に母親等の年長者が 2, 3 歳までの幼児を可愛がって、赤ちゃんの腕・お腹などに有声両唇ふるえ音を発している唇でキスをすると、赤ちゃんはくすぐったいので笑って喜ぶという。中国天津市薊県出身当時 20 代男性 (調査者② (漢民族); 調査者②がその父と、同郷の同世代の女性 1 名にも聞いて情報を寄せた) によると、親の世代のみならず、同世代の女性もこれを自身の習慣として持っていて、腕・お腹のみならず手・お尻にも、ふるえる唇でキスするという。

調査者①によると、朝鮮族には、あざける際に首を左右に振りつつ 4~6 回舌を打つ場合と、犬を呼び寄せる際に 8 回以上、近づいてくるまで何度でも舌を打つ場合とがあるという。調査者②によると、薊県の漢民族で、感情を表わす 1~3 回の舌打ちは、その時の表情等によって、責める・不満の気持ちか褒める・羨む気持ちのいずれかを表わし、また鶏・鳩・犬などを餌や

り等で呼び寄せる際には2,3回以上、近づくまで何度でも、口蓋化かつ円唇化した舌打ちを続けるという。

調査者①によると、「頬を膨らませる」というジェスチャーは、女性が(カメラの自撮り等で)「自分を可愛く見せかけたい時」や、「不満な時・言葉に詰まって反論できない時」に用い、「不満」を表わす際は「子供っぽい、大人らしくない、男らしくない」という理由で、成人のあいだでは一般的ではない。調査者②によると、「頬を膨らませる」というジェスチャーは、女性が「自分を可愛く見せかけたい時」のみにするもので、「言葉に詰まって反論できない時」にはそのようにはしない。従って日本の「膨れっ面」は朝鮮半島以東の特徴であると言える。

3.2. 日本民族の資料(両唇ふるえ音と歯茎吸着音と膨れっ面)

3.2.1. 多数地点における少人数調査の資料(両唇ふるえ音)

日本列島には、有声両唇ふるえ音「プー」を長めに発して「(2,3歳までの幼児を)可愛がる・あやす・笑わせる・注意を引く」間投音「唇ブルブル」が分布する(通常、キスは伴わない)。以下、単に「プー、プー、アプー」などと書けばふるえ音を表しており、非ふるえ音である場合にはその旨を注記するように記述する。また、「(ア)プー」のIPA表記は[p̚u:]のように全体が無声になる場合もあれば[p̚u:]のように無声で始まりすぐ有声になる場合もあり、どの地点でもどちらでも構わないようであった。青森市1965年生れ女性曰く、40歳程年上の親戚がやっていたのを見た(以下、「年生れ」と「性」を省略する)。岩手県盛岡市1929男曰く、自分を含む同世代で一般的である。東京都東村山市の、野口町1938男曰く、自分もやった。恩多町1938男曰く、人がやっていたのを見た。廻田町1938男曰く、自分もやった。廻田町1937男曰く、母親がやっていたのを見た。岡山市南区妹尾・箕島では当時調査票に「あやすプー」が盛り込まれていなかったため、「叱るプー」のデータ:「妹尾1927男曰く、父親がやっていた」1件しか得られていない。広島県尾道市1936女曰く、仔犬が悪さをしたら(後述の)「プー」(但し本例は非ふるえ音)を自分が使った。高知県の、土佐市1927男曰く、自分を含み最近まで(当時37歳女性でも)、満1歳ぐらいまでの幼児に対し、頬やお尻にキスした状態からふるわせる。高知市上町1946女曰く、親の世代以上がやっていたのを見た。高知市春野町1932女曰く、後述の「叱りつけるプー」なら自分も他人もやっていた。安芸市1949男曰く、自分もやった。鹿児島県上甕島里1948男・同1950男曰く、自分もやった。鹿児島県沖永良部島国頭1943男曰く、自分もやった、側面の吸着音1回も同じ意味で使った。

3.2.2. 少数地点における多人数調査の資料(両唇ふるえ音)

「唇ブルブル」(ふるえ音による「プー」を調べ、個人により「プー」の回答もあり)について、「あやす(又は叱る)目的で幼児に唇を震わせることはありましたか」という形を基本形とし、話者に応じて更に詳しく聞いていく形の質問(以下、「土台に調査票を用いた録音調査」とする)で、東京都文京区在住の60歳以上の東京23区出身者を無作為に(シルバー人材センターで調査事務を依頼、以下同様)30名調査したところ、

文京区 1936, 1936, 1939, 1942 男・1937, 1946 女, 台東区 1935, 1937 男, 中央区 1939 男
 曰く, 自分もやった,
 文京区 1936, 1941, 1943 男・1945 女, 台東区 1939, 1945 男, 中野区 1940 男曰く, 人が
 やっていたのを見た,
 (「あやす」合計 16 名)。

同様に, 岡山市在住の 60 歳以上の岡山市周辺出身者を無作為に 30 名調査したところ,
 赤磐市 1936 男, 北区 1943 男, 東区 1937 男, 中区 1940 女曰く, 自分もやった,
 北区 1932, 1944 男・1938 女, 東区 1951 男, 中区 1945 男曰く, 人がやっていたのを見
 た,
 (「あやす」合計 9 名)。

北区 1941, 1945 男曰く, あやすのではなく叱る意味で自分もやった,
 北区 1931, 1935, 1944 男曰く, 人がやっていたのを見た,
 (「叱る」合計 5 名)。∴ (「あやす」及び「叱る」総計 14 名)。

同様に, 高知市在住の 60 歳以上の高知市周辺出身者を無作為に 30 名調査したところ,
 高知市 1931, 1941, 1951 男・1942 女, 土佐町 1948 女曰く, 自分もやった,
 高知市 1944, 1945, 1950 男・1940, 1948, 1953 女曰く, 人がやっているのを見た,
 高知市 1941 男曰く, 顎を左右に振りながら自分もやった,
 高知市 1946 女曰く, あやす時に「プー」を自分も使った,
 (「あやす」合計 13 名)。

両親が長岡郡出身の高知市 1938 女曰く, 「しちゃダメ」という意味の「プー」なら自
 分も周囲の間人も使っていた,
 (「叱る」合計 1 名)。∴ (「あやす」及び「叱る」総計 14 名)。

以上より, 「唇ブルブル」に関しては, 肯定的な回答 (上述したような回答) が 5 割程度であ
 り, いずれ失われる傾向にあると言える (つまり, 残りの 5 割程度は否定的な回答 (自分は使
 わず, 慣習として認知してもいない) だったということ)。

3.2.3. 岡山市における多人数調査の資料 (両唇ふるえ音)

岡山市南区箕島には, 両唇ふるえ音による「プー・アプー」を発して「(2, 3 歳までの幼児や,
 場合により児童, 仔犬~成犬を) 叱りつける・禁止する」間投音・感動詞 (=間投詞) がある
 が (1935 女, 1932, 1934, 1935, 1941 男), 同・妹尾ではふるえが自由変音²より少し強い程度に
 まで弱まる (1928, 1932 男)。感動詞「アプー」は全国的には「アップ (非ふるえ音)」で現れ
 る (高山 2012)。箕島には, 池や風呂の水面のすぐ下で両唇ふるえ音の「プー」を発する遊戯
 や (1935 女, 1934, 1935 男), 標準語の「(溺れて) アップアップと」に当たる両唇ふるえ音の
 「アプーと」もある (1932 男)。また, 3.2.2 節で述べた岡山市 30 名調査で, 赤磐市 1936 男, 北

² 高山 (2011) では岡山市南区箕島・妹尾の/p, b/の自由変音としてごく軽い程度のふるえ音を報告している。

区 1945 男曰く、「アッパー（非ふるえ音）」を自分も使った。北区 1931 男，中区 1944 男曰く、「アプー（非ふるえ音）」を自分も使った，北区 1935 男，中区 1940 女曰く，人が使っているのを見た。なお，叱るのではなくあやす意味で「アップ（ツプ）」（非ふるえ音）を使う例が各地で散見されたが，伝承童謡「にらめっこ」の歌詞「アップップ」の影響と見て，ここでは挙げていない。

3.2.4. 多数地点における少人数調査の資料（歯茎吸着音）

日本列島には，前寄りの吸着音を 1 回発して「怒り・苛立ち・不平」を表わす間投音「舌打ち（以下 A）」や，連発して「（餌をやる際など，鳥獣を）呼ぶ・注意を引く」間投音「ねず鳴き（以下 B）」が分布する。青森市話者曰く，自分含む若い世代もやる，B は犬・猫に対し 5 回以上を 2 回（回数に関しては話者の自己申告，以下同様）。盛岡市話者曰く，A は言葉で「チェツ」，B ナシ（「言葉で」というのは通常の方節音で[tceʔ]のように発音するということ，以下同様）。東村山市の，野口町話者曰く，自分もやる，B は鶏・雀など。恩多町話者曰く，自分もやる，B は 5, 6 回以上で野鳥・猫・鶏・犬。秋津町 1935 男曰く，自分もやる，B は 12 回以上で猫。久米川町 1938 男曰く，A はやる人もいる，B は自分で野鳥に。廻田町 1938 男曰く，A ナシ，B は自分も猫にやる。廻田町 1923 男曰く，A ナシ，B は自分も豚・鶏の仔に餌をやる際にやる。多摩湖町 1936 男曰く，A ナシ，B は自分も鳩にやる，鶏には言葉で「トットトットトット」。岡山市南区妹尾 1927 男曰く，A は自分もやる，B は父親が犬に。妹尾 1930 男曰く，自分もやる，B は犬猫を呼ぶ。妹尾 1947 男曰く，A ナシ，B は見たことはある。妹尾 1932 男曰く，A はする人はいる，B ナシ。広島県尾道市 1933 女曰く，自分もやる，B は雀・小鳥に 3 回以上。高知県の土佐市話者曰く，A は「チェツ」，B は自分も犬にやる，鶏には「トイトイトイトイトイ」，鶏の幼児語は「トイトイ」。高知市上町話者曰く，人がやるのを見た。高知市春野町話者曰く，人がやるのを見た，B は昔は野鳥・鶏にも，今は犬・猫に。安芸市話者曰く，A は子供の時あった，B は昔は鶏にも，今は犬・猫に。甕島話者 2 名曰く，自分もやる，B は猫・野鳥・鶏に，鶏には「トイトイトイトイトイトイトイトイ」（7, 8 回）。沖永良部島話者曰く，自分もやる，B は鶏・犬・猫・小動物に，鶏には「トウイトウイトウイトウイ…」。

3.2.5. 少数地点における多人数調査の資料（歯茎吸着音）

「舌打ち（以下 A）」、「ねず鳴き（以下 B）」について，「怒りなどを表わす舌打ちというものはありましたか」，「舌を何度も鳴らして鳥や獣を呼び寄せることはありましたか」という形を基本形とし（土台に調査票を用いた録音調査），東京都文京区在住の 60 歳以上の東京 23 区出身者を無作為に 30 名調査したところ，

文京区 1936 男，中央区 1939 男，台東区 1935 男曰く，A B とも自分もやった。

台東区 1937 男，千代田区 1943 男，文京区 1944, 1947 男・1940, 1943, 1945, 1946 女曰く，A は人がやっていたのを見た，B は自分もやった。

台東区 1939 男・1947 女，文京区 1940 男・1943 女，中央区 1935 男曰く，A は言葉で

「チェツ」、Bは自分もやった。

文京区 1936 男, 中野区 1940 男曰く, ABとも人がやっていたのを見た。

文京区 1942 男曰く, Aは人がやっていたのを見た, Bナシ。

文京区 1936, 1939, 1941, 1942, 1943 男曰く, ANシ, Bは自分もやった。

文京区 1949 男・1936, 1948 女曰く, ANシ, Bは人がやっていたのを見た。

両親が岐阜県出身の葛飾区 1940 男曰く, Aは自分でもやった, Bは鶏に言葉で「トトトトトト」。

(以上, Aは合計 15 名, Bは合計 26 名。)

同様に, 岡山市在住の 60 歳以上の岡山市周辺出身者を無作為に 30 名調査したところ,

北区 1935, 1941, 1944 男, 東区 1951 男, 中区 1944, 1947 男, 南区 1947 男曰く, ABとも自分もやった。

北区 1937, 1948 男曰く, Aは自分もやった, Bは人がやっていたのを見た。

赤磐市 1936 男, 北区 1947 男・1938 女, 東区 1938 男, 中区 1945 男, 南区 1936 男曰く, Aは人がやっていたのを見た, Bは自分もやった。

北区 1932 男, 南区 1941 女曰く, ABとも人がやっていたのを見た。

南区 1948 女曰く, Aは人がやっていたのを見た, Bナシ。

北区 1935, 1944 男曰く, Aは言葉で「チェツ」、Bは自分もやった。

北区 1935, 1943 男, 中区 1944 女, 南区 1944 男曰く, ANシ, Bは自分もやった。

北区 1931 男, 中区 1946, 1950 男曰く, ANシ, Bは人がやっていたのを見た。

東区 1948 男曰く, Aは自分もやった, Bは側面音なら自分もやった。

なお, 口笛で鳥や犬を呼ぶという回答も少数見られた。

(以上, Aは合計 19 名, Bは合計 27 名。)

同様に, 高知市在住の 60 歳以上の高知市周辺出身者を無作為に 30 名調査したところ,

高知市 1931, 1933, 1940, 1944, 1945, 1948, 1949, 1950, 1951 男・1942, 1946, 1946, 1947, 1947, 1948 女, 土佐市 1951 女, 土佐町 1948 女曰く, ANシ, Bは自分もやった。

室戸市 1929 男曰く, Aは言葉で「チェツ」、Bは自分もやった。

高知市 1938 男曰く, ANシ, Bは人がやっていたのを見た。

高知市 1941 男・1947 女曰く, ABとも人がやっていたのを見た。

高知市 1938, 1941 男・1942 女曰く, Aは人がやっていたのを見た, Bは自分もやった。

高知市 1938, 1953 女曰く, ABとも自分もやった。

高知市 1940 女曰く, ANシ, Bは自分もやった, 鶏には言葉で「トットットット」。

高知市 1933 女曰く, Aは人がやっていたのを見た, Bナシ, 鶏には言葉で「トットットット」。

高知市 1946 男曰く, ABとも自分もやった, 鶏には言葉で「トットットット」。

(以上, Aは合計 9 名, Bは合計 28 名。Aの申告数が極端に少ないが, これは高知市における舌打ちの持つ意味が他の地域と比べ, より「攻撃的」な為か。)

「舌打ち」は「お行儀が悪く悪癖である」という特徴のため、肯定的な回答が5割程度しかないことを額面通りには受け取れない。筆者（1983年生れ）も舌打ちをすることがあり、まだまだ現役の間投音であろう。「ねず鳴き」は肯定的な回答が9割であり、高年層においてはなお現役の間投音であると言えるが、筆者は実生活で「ねず鳴き」をしたことがない。

3.2.6. 多数地点における少人数調査の資料（膨れっ面）

日本列島には、意図的に頬を膨らませて「(陰に) 不満を表明する」無音間投音「膨れっ面」が分布する（これに対して「舌打ち」は「(陽に) 不満を表明する」機能があり、使い分けられていると考えられる。「無音間投音」は本稿の造語で、機能的には間投音に分類されるが、音声ではなく表情で伝達する。マガーク効果としてよく知られているように、我々は相手の口元を無意識に読み取りながら音声を聞いているので、口元の表情と音声とは根本的に切り離すことができない。従って[p:]という無音の音声による間投音と分析できる。無音であるということは不満を陽に伝達しない、自分の顔色を覗いてくる人にだけ伝達する、という機能を発揮することになるので、誰彼構わず不満を伝達する機能を有する舌打ちとは対を成している。

青森市話者曰く、自分ではやらないが子供はやるかもしれない。盛岡市話者曰く、やる人は少ない。東村山市の、野口町話者曰く、今はいないが自分が小学校ぐらいの時までは子供も大人もやっていて、身分が低い人が言いたいことを言えなくてする。恩多町話者曰く、5, 6歳ぐらいまでの子供を叱る時にする。秋津町話者曰く、「ぶっとする」と言い、大人が思う通りにならない時やっているのを見た。廻田町話者曰く、自分が20歳ぐらいの時大人も子供もやっていた。高知県の、土佐市話者曰く、ちょっとした怒り・不平を表現するのに、子供がプッと頬をふくらまず、「ふくらぐち」と言う。高知市上町話者曰く、見たことがある、子供がやる。高知市春野町話者曰く、大人も子供もやる。安芸市話者曰く、昔は大人もやっていたが、今は子供はするが大人はしない。甕島話者2名曰く、大人が2, 3歳までの子供を「あやす・注目を引く」ために頬を膨らませることは社会習慣として存在する、子供が怒ってふくれっつらになっているのは表情としては見たことがある。沖永良部島話者曰く、そんなに見ないが子供の頃爺さんたちがやっていたかもしれない。左記の通り、東北地方と鹿児島県以南には確認できない。

3.2.7. 少数地点における多人数調査の資料（膨れっ面）

「膨れっ面」について、「不満を表わして頬を膨らませる膨れっ面というものはありましたか」という形を基本形とし（土台に調査票を用いた録音調査）、東京都文京区在住の60歳以上の東京23区出身者を無作為に30名調査したところ、

中央区 1935 男曰く、自分の娘が母親に小言をくうとやっていた。

台東区 1939 男曰く、周囲の女性が不満を表わす時にする。

文京区 1940 男曰く、昔は見たが男性の方が多かった。

文京区 1939 男曰く、昔は子供がやっていた。

文京区 1947 男曰く、最近も見るが女性の方が多く、悪口を言われて立腹を表現する。

文京区 1943 女曰く、怒り・不平を表わすのに自分も周りもする。

台東区 1935 男曰く、怒り・不平を表わすのに小さい時は自分も周りもやっていた。

千代田区 1943 男曰く、小さい頃はあったが自分ではやらない。

文京区 1936 男曰く、あるが自分ではやらない。

文京区 1949 男曰く、小学校の時は見た、子供が怒った表情を見せるためにやる。

文京区 1946 女曰く、わざとやる怒ったポーズで自分も周りもやっていた、中学校ぐらいまでの子供がやる。

文京区 1936 女曰く、自分も周りもやっていた、父に怒られた時など口答えをしてはいけないからやる。

文京区 1943 男曰く、昔は見たが自分はしない。

文京区 1944 男曰く、自分はしないが小さい頃女の子が学校などでやっていた。

台東区 1937 男曰く、自分はしないが子供の頃は見かけた。

文京区 1945 女曰く、子供の頃自分も周りもやっていた、女性が多く、大人は見ない。

中野区 1940 男曰く、自分の姉・妹が、思う通りにならない時・親に怒られた時に、しょっちゅうやっていた。

文京区 1940 女曰く、子供の時は自分も周りも男女問わずやっていた。

文京区 1942 男曰く、周りで少し見たことがある。

文京区 1936 男曰く、自分はしないが見たことがある。

(以上、30名中20名が肯定的な回答を寄せた。)

同様に、岡山市在住の60歳以上の岡山市周辺出身者を無作為に30名調査したところ、

北区 1937 男曰く、自分はしないが時にはある。

北区 1935 男曰く、大人はしないが子供はやる。

北区 1932 男曰く、小さい時はした、大人はしないが子供はやった。

赤磐市 1936 男曰く、見たことはある、自分の子供はやっていた。

中区 1940 女曰く、女の子がよく拗ねる子がよくやっていた。

北区 1941 男曰く、自分はしないが娘がやっていた。

北区 1948 男曰く、自分も周りもやっていた。

北区 1944 男曰く、自分の周りで見る、大人もやる。

北区 1944 男曰く、自分はしないが周りでやっているのを見た。

北区 1951 男曰く、今でも自分も周りもする。

中区 1947 男曰く、小さい時自分も周りもやっていた。

北区 1931 男曰く、自分はしないが見たことはある。

北区 1943 男曰く、自分の子供がよくやる、女房も時々していた。

北区 1935 男曰く、見たことがある、自分も子供の時はやった。

南区 1936 男曰く、子供がそういうことをする。

南区 1947 男曰く、自分はしないが子供時代に偶にはあった。

南区 1948 女曰く、自分も子供の時にしていた。

(以上、30名中17名が肯定的な回答を寄せた。)

同様に、高知市在住の60歳以上の高知市周辺出身者を無作為に30名調査したところ、

高知市 1949 男曰く、自分はしないが見たことがある。

高知市 1940 女曰く、見たことがある、自分も小さい時にやった、声は出さずにやる。

高知市 1945 男曰く、自分はしないが稀に見た。

高知市 1951 男曰く、小学校いっぱいぐらいまではあった。

土佐市 1951 女曰く、自分でもした。

高知市 1946 女曰く、自分はしないがよくやっている人を見た。

高知市 1933 男曰く、子供がしているのを偶に見かける。

高知市 1941 男曰く、学校でやっている人はいた、「ふくれる」と言う。

高知市 1948 女曰く、自分も周りもやっていた。

高知市 1953 女曰く、自分もやった、子供の頃は男女問わずやっていた。

高知市 1941 男曰く、男女ともに子供も大人も見られた。

高知市 1942 女曰く、主に女性に見られた、だいたい大人がやっていた、怒りを飲み込む動作である。

高知市 1938 女曰く、自分も小さい時やった、子供はやる、女の子が多い。

高知市 1946 女曰く、周りであった、子供同士でやる、女の子の方が多。

高知市 1933 女曰く、自分たちもやった、子供はよくやった、怒られたり嫌いだったりする時。

室戸市 1929 男曰く、自分はしないが見たことはある、子供がよくする。

高知市 1946 男曰く、子供の頃自分もした、男女ともやる、子供の方が大人より多。

高知市 1947 女曰く、自分も子供の時にした。

高知市 1938 女曰く、自分もしたことがある、男女ともに、子供の方が大人より多。

(以上、30名中19名が肯定的な回答を寄せた。)

「膨れっ面」は肯定的な回答が6割程度となり、高年層では現役の無音間投音と言える。しかし筆者(1983年生れ)は同世代以下において「膨れっ面」をしている人間を目撃した記憶が殆どなく、筆者自身もやらない。他方で、漫画等には頻繁に描写されるので、「膨れっ面」という記号表現が存在するということだけは昔から知っていた。また、筆者は「膨れっ面」は子供の所作であるという印象を持っており、大人はしないだろうと何となく思っていた。また、男性(男の子)よりは女性(女の子)の方が「膨れっ面」をよくするだろうとも思っていた。これらは実際の調査で概ね正しいと判明した。

3.3. 考察(1)——間投音「唇ブルブル、ねず鳴き、舌打ち、膨れっ面」——

さて、以上のデータより先ず言えることは、「唇ブルブル」、「ねず鳴き」、「舌打ち」、「膨れっ面」が日本列島には広く分布しており、朝鮮族・漢民族の間投音との類似点まで指摘できる。

間投音ゆえ比較言語学が再構する「祖形」の対象とはならないが、広範な地理的分布を根拠として、歴史的には日本祖語³と同時代程度には既に、日本語の「傍らに」存在していたと考える。但し「膨れっ面」は東北地方以北と鹿児島県以南では確認できていないのでその点に注意が必要である。

3.4. 考察（2）——間投音「プー」、感動詞「アプー」——

次に、岡山市南区箕島と高知県の一部に（非ふるえ音を含めれば岡山市全域や尾道市まで）分布する無声両唇ふるえ音「プー・アプー」と、本州に分布する感動詞「アップ」、伝承童謡「にらめっこ」の歌詞「アップップ」の関係について考察する。この無声両唇ふるえ音は一部の地域の特徴にすぎない。ふるえ音の「プー・アプー」はそれぞれ「(2,3歳までの幼児や、場合により児童、仔犬～成犬を) 叱りつける・禁止する」間投音と感動詞だが、ふるえ音の「プー」は岡山市南区箕島と高知県長岡郡・高知市春野町でしか見られず、ふるえ音の「アプー」は岡山市南区箕島でしか見られない。他方で同源語と言える「アップ」という感動詞は本州に広く見られ、四国・九州からは見つかっていない（高山 2012）。伝承童謡「にらめっこ」の歌詞「アップップ」は本州では保持されるが⁴、四国・九州では「うんとこどっこいしょ」など、他の歌詞に置き換えられており、これは元々当地では「アップ」という語が存在せず、歌詞が意味不明であったために置き換えられたと説明される（高山 2012）。従って感動詞「アップ」の分布域は本州に限定される。

間投音「プー」については、地理的分布が狭い事から、歴史を遡る議論をすることが難しい。

感動詞「アプー、アップ」⁵や擬態語「アプーと、アップアップと」はそれぞれ同じ意味であり、音形も類似しているため、同源語と認められる。岡山市南区・中区・北区・赤磐市に「アプー、アップ」が分布しており、岡山市周辺に共通の祖形が再構できるが、祖形の実際の音価がふるえ音かは不明である。また他の本州には「アップ」⁶が分布しており、本

³ 本稿の「日本祖語」は日本語諸方言（あるいは日本語族の諸言語諸方言）全ての共通の祖語のことを指す。

⁴ 高山（2012）で比較言語学的手法に倣って“再構”した伝承童謡「にらめっこ」の歌詞の“祖形”は「だるまさんだるまさん にらめっこしましょ わらうとだめよ／まけよ あっぷっぷ」であり、「だめよ／まけよ」は当初から併存していたと考えた。NHKにより普及した現代の標準的な歌詞では「まけよ」となる。歌詞の意味は「坊や坊や お説教です 可笑しくなんてありません／ないもんね もうしたら駄目ですよ」と解釈した。伝承童謡の成立年代は明治末年前後と推定され、児童などの口伝で全国に伝播したため、各地の方言などの影響で歌詞が著しく置き換えられた。置き換えの例として、高山（2012）の後で発見された文献資料をここに紹介する。日本放送協会編（1957: 17-20）『NHK 学校放送小学校楽譜集低学年用第二集』（勝田哲司（有限会社 ミューテック取締役）蔵本の初版と、東京藝術大学小泉文夫記念資料室蔵本の二版（1959）を閲覧した）を見ると「権藤はな子新作詞・坊田かずま編作曲」で「原歌詞かつ1番」として「だるまさん だるまさん にらめっこしましょ 笑うといやよ アッ プッ プ」, 「新作詞かつ2番, 3番, 4番」として「にらめっこしましょ」の部分を変えて「よこめで にらんだ, ほっぺが ふくれた, おはなが 動いた」となっている。実は「いやよ」という歌詞は本資料独自のもので、真の「原歌詞」からは明らかに置き換えられている。その後、NHKの内部で「まけよ」に訂正されたと思われる。このように歌詞の置き換えはしばしば起こるが、その中でも「アップップ」という部分は本州では比較的堅固に維持されていることが文献資料から分かる。

⁵ 「アップップ」は「アッチッチ（熱）」同様、幼児語特有の畳音であるか、あるいはメロディに合わせて繰り返された畳音であって、ふるえ音を反映した畳音ではないと考えるのが穏当であり、その考えを採る。

⁶ 「アップ」は友定編（1997: 210）「怒って口をとがらせ、頬をふくらます動作」を伴い、高山（2012）ではこれを描画する大正以降の文献を3例示した。これを「アップ」の「プ」の音声的特徴「強い呼気」と見る。即

州に共通の祖形が再構できるが、祖形の実際の音価がふるえ音かは不明である。ふるえ音は新しい時代に出現した可能性もある（後述）。

4. 資料と考察（3）——筆者によるもの（岡山市南区妹尾周辺のふるえ音）——

4.1. ラ行子音の自由変音としての舌尖ふるえ音

妹尾周辺の /r/[r~r~d~] の音声の基本は破裂音ないし flap だが、本稿では破裂音も [r] で書く。/ru/ は話者によってはそり舌ぎみだがこれも [ru~ru] で書く。語中では弱まって接近音 [ɹ] になったり脱落したりもする。ふるえ音 [r] にもなる；妹尾 1932 男「居らなんだんじゃ [ora:nandʒa]・そつりやあもう [hər:ja'mo:]⁷・(玉鋼(たまはがね)が) トロロロっとう降りて [təɾə:rottoko:orite]」、箕島 1941 男「(自動車が) プルルル [b̥uɾu:]」。但し [ɾu:] 等はふるえ音と母音が一体的に継続する音声を表す。[r] が出る理由として、妹尾 1932 男曰く「相手を威嚇するような意味で [r] が使用された」という。箕島 1935 女曰く「箕島では使われなかったが妹尾の方では [r] を使っており、男性が自分の意見を主張する意識を伴う」という。しかし彼女自身も「西瓜を井戸の中へポロンと [p̥ərəntə] 浸けて」と発音した。妹尾 1951 女曰く「妹尾の同世代(約 60 歳)では男性が喧嘩の際に箔を付ける為に [r] を用いるが、普段は用いない」という。傾向としては prominence (音調的な卓立) があるか、またはオノマトペだと [r] になり易い。ラ行子音の自由変音としての [r] は旧妹尾町(妹尾と箕島)の地域的特徴であり、比較的若い世代にも残る。[r] の個人的特徴は；妹尾 1932 男は多用、妹尾 1946, 1932, 1930 男・箕島 1934, 1941 男・箕島 1941, 1940 女は有り、妹尾 1928 男・箕島 1935 女は僅少、妹尾 1930 男・庭瀬 1948 男は不明、妹尾 1951 女・箕島 1934 男は無し。

4.2. パ行・バ行子音の自由変音としての両唇ふるえ音

前述したように、両唇ふるえ音は普通 [p, b] と書くが本稿では [p, b̥] と書く。tap は [p̥, b̥], 短いふるえ音は [p̥, b̥] と書く。ふるえ音と母音が一体的に継続する場合は [p̥u:, p̥bu:, bu:] と書く。[p, b] 直後の母音は任意だが、[i, u] 等狭い母音のみ一体的に継続できる。本稿でははじき音のうち tap は“上下から近づいて一瞬触れる”，flap は“すれ違いながら一瞬触れる”調音として区別する。両唇の tap は時間長の短い破裂音と同一視して [p̥, b̥] と書く。⁸

妹尾周辺の恣意的言語記号・オノマトペにおける /p, b/ の自由変音の範囲は [p~p̥~p̥p,

ち、この「p̥」は 1 モーラよりは長かったと考えてよい。

⁷ 硬口蓋化を表し拗音を作る IPA の右肩付きの [j] は小さくて見づらいので、本稿では右横に付けて書く。

⁸ 両唇ふるえ音には嘴唇(はしくち, pouting; 筆者の造語), 円唇(まるくち, rounded), 平唇(ひらくち, neutral), 張唇(はりくち, spread) の 4 形状が考えられる。嘴唇は唇の突き出しを表し、壺口(つぼくち)は円唇ぎみの嘴唇に当たる。嘴唇は振り子が長く、唇周りが膨れる様子が観察できる。非嘴唇は紅い部分だけを用いるので振り子が短く、唇周りは膨れない。一般的な言語音では嘴唇と非嘴唇の中間的な振り子の長さになると考える。この振り子は、下唇をめくって放すと戻る事から力学的バネに当たる。極端な円唇は両唇の中央部分だけを用い、弱い張唇(IPA [u] 程度)は両唇の左右の端まで用いる。言語音では母音が [i, e, a] なら弱い張唇ぎみに、[o, u] なら弱い円唇ぎみになると考える。ふるえ音では脱力部位が呼気にふるわされて振り子のようなものになるが、強い張唇(IPA [i] 程度)だと脱力できず、通常より多い呼気で無理に「震動」させることになる。音声学的に厳密に見ると両唇ふるえ音にはここで挙げた 4 形状があるが、本稿ではこの違いは問題としていない。

b~b̥~b̄~b̄̄] となり, /r/ 同様, プロミネンスがある場合とオノマトペでふるえやすい; 妹尾 1932 男「じゃからあの今沖繩やこの話, 出るけれど, あれ, あのトカラ列島言うてな, 鹿児島からずーつといー, ポッポッポッポッポッポーつと [pəp̄p̄əp̄p̄əppoppotto] こう弓になって, へーで, なんがあるんじゃ, 沖繩があるんじゃ, 妹尾 1928 男「五十音図音読 [p̄a pi ru pe p̄o b̄a bi bu be b̄o]・ブンブンブンは蜻蛉じゃ [bumbumbuŋwa tomboza]・蜻蛉もブンブン飛ぶ言うで [tombomo bum̄sun tobujude]・バーンと [b̄anto], 妹尾 1946 男「新聞か [sim̄bun̄ka]・あの一編その, 婆 [baŋa:] がわしにな, オツツァン言うて, 己 [ʔoddore] なんじゃボケ [b̄oke] このなん…己 [oddore] 婆め [b̄aŋame], ええ加減にせえおめえアーサン言うんそういう時にゃあ, 妹尾のものじゃろーが言うて言うたことがある。(体罰禁止と学級崩壊について) へーじゃけえなあ子供が, ボケて [b̄b̄okete] しまうんじゃ, 箕島 1935 女「並ぶ」音読 [naraŋu], 箕島 1935 女・箕島 1934 男「なんぼー [nam̄bo:], 箕島 1941 女「棒が [b̄o:ŋa]・塩分で [em̄bunde]」。なお /m, n/ に破裂とふるえの揺れが見られる話者がいた (妹尾 1932 男 (例: 昔は [b̄ukaŋiwa])・箕島 1941 女)。

/p, b/の自由変音としての [p, b] (調音時の両唇の脱力による) は旧妹尾町の地域的特徴で, 老年層にのみ残る。その個人的特徴は; 妹尾 1932 男は三番目によくふるえる (「n 番」というのは調査に協力して下さった話者の中での順位で, 調査者がその順位を判断した)。妹尾 1930 男は微弱なふるえ。妹尾 1928 男は旧妹尾町で一番のふるえ。妹尾 1946 男は二番目, 調音実験 (ふるえ音の長音節を発音させる実験) では [ba, b̄i:, b̄u:, be, bo]。箕島 1935 女は五番目, 調音実験では [b̄u:] のみ。箕島 1934 男は僅かにふるえ, 調音実験では [b̄u:] のみ。箕島 1941 女は四番目, 調音実験では [ba, b̄i:, b̄u:, be, bo]。箕島 1940 女・箕島 1934 男は無し, 調音実験では [b̄u:] のみ。妹尾 1932, 1930 男・庭瀬 1948 男・妹尾 1951 女・箕島 1941 男は無し。

間投音や感動詞の強く長く明瞭な両唇ふるえ音については既に 3.2.1 節~3.2.3 節で述べた。

4.3. ハ行子音の自由変音としての口蓋垂ふるえ音

ハ行は /hi, he, ha, ho, (hu), hja, hjo, hjw/[çi, χe, χa, χo, (φu), ça, ço, çu] である。[χ] は弱まると [h] にもなる。箕島 1935 女「(犬が威嚇して) ファー [f̄a:]」(オノマトペ) や, 虫明 (1982: 70) 「名詞 [-φu] + 助詞へ・ハ = [-f̄i:, -f̄a:]」(屈折形) が存在する為ファ行は /fi, fa, fu/[fi, fa, fu] となる。/ha, ho/ にはプロミネンスによる自由変音 [R̄V~RV] が存在する; 妹尾 1932 男「花房でも [r̄a:anaφusademo:]・放り込むんじゃ [r̄o:ŋikomun̄ja]・裏の方は [uranoŋo:wa]」。なお調音面を音声学的に考察すると, [çr̄i:, r̄e:, r̄a:, r̄o:, φr̄u:, çr̄u:] では顎の開きが一定だが, [çr̄a:, çr̄o:] では次第に開く。

4.4. オノマトペ並びに同由来疑い語彙に現れてハ行子音と対立する口蓋垂ふるえ音

本節では妹尾の音声・音韻の特殊な部分を更に深く掘り下げるが, 次節の考察によって結果として両唇ふるえ音の全国における分布の話と関連性があることが分かる。

「風が吹く。ヒューヒュー。床を拭く。」という例文について, 次の 2 名で,

妹尾 1932 男 : [kazeγaφɾuku, çɾu:çɾu:, çɾu:çɾu:],

妹尾 1930 男 : [kazeγaφɾuku çɾu:çɾu:çɾu:çɾu: kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çɾu:çɾu:çɾu:çxu: kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:, kazeγaφɾuku çxu:çxu:çxu:çxu:çxu:]

というふるえ音の発音が聞かれた(録音を忠実に IPA 表記したもの。「吹く」の初頭子音にふるえ音の発音が聞かれ、「拭く」の初頭子音と対立していた)。この種の環境でふるえ音が確認されたのは調査した中ではこの 2 名だけであり、他の話者では同様の環境において「ふるえ音から変化したと推測される音」が確認される。妹尾 1928 男は、

「ちょっと違おう。(ん?どこが違いますか?)【()内は調査者の発言, 以下同様】ん?そりゃあの, どっかが長音になつとるはずじゃ。風が吹うく [φu:ku]【HL; ピッチの高を H, 低を L で表す】言う。なあ?あの, 拭くのは拭・く。で床を拭く [φuku]【LH】。風が吹く言うのは, 風が吹一く一, とこう, そこの所がなごうなつとりゃへんかと思う。(フの部分ですか?)フの部分。(フの部分が長うなつとる。)と思う。【中略】(風が吹くと床を拭くの音の違いがね?あるでしょ?)あるある。そりゃ, あの, 床を拭く言うのは, ふ・く, がみじけ一わな。それから, 風が吹く言うのは, 風が吹うく, とこう長うなるわな。ふ・く, が長うなるんか。【中略】(大昔に 2 つは違う音だったんだけど, もう標準語だと同じになっちゃってるんだよ。)あそう!風が吹うくも床を拭くも一緒になる?(同じフになっちゃってる。)それはちょっとおかしいわのう。(おかしいよね?)おっかしいわ風が吹うくと下を拭くとは, なあ?(ねえ。意味違うもんね。)意味違うもん。(風が吹うくって長い方がなんか感じが出るよね?)感じが出るわなあ。【中略】【息はフーフーフー [φxu:φxu:φxu:], 英語 who は who who who [φu:φu:φu:], 英語 “Who is this?” は [φu:izudis] と何度も読み分けた後】(ちょっと音違う?)違うな。[φxu:] は伸ばしよる, こっちはもう短け一 [φu:φu:φu:] って言よる。(うん。何かねえ, 唇の膨らみ方も違うし, 喉彦に何かね, 当たってるような当たってないような微妙なね, 感じがあるんだけど。)ハハハなるほどな。(むずかしいなあ。)むづかしいなあ。こりゃあ伸ばして行きよるつもりぜ?こっちはあ短こう行きよるつもりなんじゃけ一ど。(うんなるほどね。息の方は伸ばして行きよるつもりで, 英語の方はちょっと短く。)そうそうそう。」

と述べた(長さの対立と口蓋垂化)。妹尾 1930 男は、

「大袈裟に言うとかうく [φu·ku], 服 [fuku] 【HL】, 服。短け一わな服の方が。(着る方が短いですか?) そうそう服の方が。(うん, そうなんですよ。) 風が吹うくで, それから服。で, 済むが。【中略】(ただ [cu:cu:] 言う時は, ちょっとふるえ…) そう [çxu:çxu:] 言うのは, なんかこう, まあどういう…よう表現せんけど, そういうなあ, ちょっとこう, ふるわすような感じの。(ありますなあ?) [çxu:çxu:]。なあ?ただ, [cu:cu:] じゃねーやな?[çxu:çxu: çxu:çxu:]。【中略】([cu:cu:] 言う時はただの [cu:cu:] ではなくて,) うん [çxu:]。なんかこう大袈裟に言ったら [çxu:] 言うこう風のな, [çxu:çxu:] 言うんと。ただ [cu:cu:] だけじゃおえんような気がするわな, 喉の感じ言うんかなに言うんか。」

と述べた(長さの対立と口蓋垂化)。妹尾の北方に位置する北区庭瀬 1948 男は「風が吹うく。風が吹うく。風が吹うく。服を着る。服を着る。服を着る。あの, ふ・くっていう, ふ・くっていう, 着る服は, ふくが短いですよ?風が吹うく, ちょっと長い。」と述べた(長さの対立)。妹尾 1927 男は「服・拭く」に比べて「吹く」の「フ」は「少し長い」と述べ, 実際そのように発音した。妹尾 1943 女は「吹く」[φxuku] と「服・拭く」[fuku], 「吐く」[çaku] と「掃く」[haku] で発音し分け, 無声口蓋垂摩擦音の要素を「気持ち強い」と表現した(※本話者から「吐く」が調査対象になった)。以下, 「強い」に類する表現は「無声口蓋垂摩擦音の要素が加わる」ことを, 「長い」に類する表現は「半モーラ程度長さが加わる」ことを意味する。妹尾 1927 男(再調査)は「夫婦・who」に対する「(息を) フーフー」や, 「掃く・履く」に対する「吐く」は「強くて長い」と述べ, 実際そのように発音した。妹尾 1930 男(再調査)は「服」に対する「吹く」と「夫婦」に対する「(息を) フーフー」の「長さ」を自覚し, 実際そのように発音した(※本話者から「(風邪を) ひく」も調査対象にした)。妹尾 1928 男は, 「吹く」と「拭く」, 「(風が) ヒューヒュー」と「ヒューマン」, 「(息を) フーフー」と「夫婦」, 「吐く」と「掃く」, 「(風邪を) ひく」と「(線を) ひく」はそれぞれ, 「きつめ/弱め, 力が入る/入っていない, 力が要る/弱くなる, 力が要る/弱くなる, 力が強い/弱い」という関係にあると述べて, 実際に各前者を「強く長く」発音した。箕島 1932 男は「(風邪を) ひく」[çiku] と「(線を) ひく」[çiku] の違いを自覚し, 実際そのように発音した(※ここでは口蓋垂化の有無でなく母音の有声/無声の対立となっているが, 妹尾 1928 男が持つような口蓋垂化の有無の対立から変化したものと推測される)。

上述の岡山市 30 名調査で, 北区 1944 男は「吹く」と「拭く」, 「吐く」と「掃く」はいずれも前者が「強く長い」と自覚し, 「(風邪を) ひく」[çiku] と「(線を) ひく」[çiku] の違いを自覚し, それぞれ実際そのように発音した。中区 1945 男は「吹く」と「拭く」では前者を「長く」, 「吐く」と「掃く」では前者を「強く長く」発音したが, 自覚は弱かった。中区 1950 男は「吹く」と「拭く」では前者を「長い」と自覚し, 実際そのように発音した。北区 1931 男は「吹く」と「拭く」では前者を「強い」と自覚し, 実際そのように発音した。南区妹尾

1943 男は「吹く」と「拭く」, 「吐く」と「掃く」はいずれも前者を「強い」と自覚したが, 発音も安定して「強かった」のは「吹く」だけだった。北区 1935 男は「吹く」と「拭く」では前者を「長く」, 「吐く」と「掃く」では前者を「強く」, 「(風邪を) ひく」[çiku] と「(線を) ひく」[çiku] では前者を無声化せず発音し, それぞれ自覚もあった。南区福田 1944 男は「吹く」[φu:ku] (LHL で, 最初の L の時間長が通常の半分程度) と「服」[φuku] (HL), 「吐く」[χa:ku] (LHL で, 最初の L の時間長が通常の半分程度) と「掃く」[χaku], 「(風邪を) ひく」[çi:ku] と「(線を) ひく」[çiku] のように発音し, それぞれ自覚もあった。

以上の事から, 「風・風邪・息」という文脈における, 「吹く」の「フ」, 「ヒューヒュー」の「ヒュー」, 「フーフー」の「フー」, 「吐く」の「ハ」, 「引く」の「ヒ」について, 「半モーラ程度長さが加わる」か「口蓋垂摩擦音の要素が加わる」か「本来無声化する環境であつても有声のまま保たれる」か「口蓋垂ふるえ音の要素が加わる」ことがあると分かった。なお, 「ハーハー」, 「ヒーヒー」, 「振る」, 「震える」も多人数で調査したが同様の特徴は認められず, また妹尾 1928, 1932 男・箕島 1935 女に聞くと, 標準語と同様にオノマトペ [pju:pju:, bju:bju:] (風の音) も存在するがふるえ音などは認められなかった。その他にも『日本国語大辞典第二版』には「ふう①息・湯気・煙などが吹き出すさまを表わす語」, 「ふうふう 煙や湯気が吹き出すさま, 口をとがらして息を強く吐くさまなどを表わす語」とあるが, これらは調査していない (ふるえ音でない蓋然性が高い)。「風・風邪・息」という文脈は, 呼気や吸気⁹ そのものと類似しており, 記号論で言うところの類像が成立する。慣習的なオノマトペや臨時的なオノマトペにおけるふるえ音の現れやすさも考慮すると, 「吹く, 吐く, 引く」はいずれも「オノマトペ (フ・ハ・ヒ) + 動詞化語尾 (ク)」という構造に由来する可能性がある。

4.5. 考察 (3) ——オノマトペ「ヒュー, フー」, 動詞「フク, ハク, ヒク」——

ハ行子音 /h/ の再構形が /*φ/¹⁰ を経て /*p/ (日本祖語) に至ることはよく知られている (上野 2008: 31-72)。従って, 上記の 5 語の頭子音の再構形は, 前節では「口蓋垂ふるえ音の要素が加わる」話者は 2 名しか確認できておらず, また岡山市という限られた地域でしか見つかっていない特徴ではあるものの, 可能性としては, /*ʀ/ と /*φʀ/ を経て /*ʀ?p/ (日本祖語) に至る可能性もある¹¹。万葉集 2991 番歌「蜂音(ぶ)」(上代語辞典編修委員会 (編) (1967) 『時代別国語大辞典上代編』より引用) に例証されるオノマトペ「ブ」の頭子音も, ふるえ音 /*ʀ?p/ (日本祖語) であった可能性は否定できない。しかしながら, ふるえ音は新しい時代に出現した可能性もある。臨時的なオノマトペにおけるふるえ音の現れやすさは¹²,

⁹ 「(風邪を) 引く」は, 新村出 (編) (1998) 『広辞苑第五版』の「①息を吸い込む。くしゃみする。日葡辞書「ハナ(鼻)ヲヒク」, 「②ひきこむ。風邪にかかる。」を見ると分かるように, 語源的には「(悪い風を) 吸い込む」の意と見られる。現代では菌やウイルスが原因と知られているが, 古代では穢れた風が原因と考えられていたようである。

¹⁰ ここで子音の左肩に付けた「*」は比較言語学的な再構形であることを示す記号である。

¹¹ ここで再構形の左横に付けた「?」は再構形の不確かさを表す記号で, 複数付ければより不確かになる。

¹² 機関銃やエンジンの音を両唇ふるえ音や舌尖ふるえ音で表現した経験はないだろうか。反復しながら継続する音を表現するにはふるえ音は適しており, いつでも「臨時」から「慣習」に変化しようと考えられる。

ふるえ音がどの時代からでも出現しうる可能性を示唆している。

5. おわりに

本稿ではふるえ音や吸着音や膨れっ面という間投音の日本列島等における調査資料を示し、歴史の考察を実施した。筆者の興味関心の中心はふるえ音の歴史の考察にあった。オノマトペ並びに同由来疑い語彙に現れる口蓋垂ふるえ音や口蓋垂ふるえ音から変化したと考えられる音声については、岡山市南区妹尾を中心とした地域に広く分布していると考えられるが、実際に口蓋垂ふるえ音で発音する話者が2名しか確認できていない点や、岡山市内ないし岡山県内あるいは岡山県外でどこまで広がっているのか分からない点は今後の課題である。

参考文献

- Alpher, Barry (1994) “Yir-Yoront ideophones.” In Leanne Hinton, Johanna Nichols and John J. Ohala (eds.) *Sound symbolism*, 161-177. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ayotte, Charlene & Ayotte, Michael (2003) *Sociolinguistic language survey of Ngwe: Fontem, Alou, and Wabane Subdivisions, Lebalem Division, South West Province*. Dallas: SIL International.
See: <https://www.sil.org/resources/archives/9119>
- Brown, Lea (2005) “Nias” In Alexander Adelaar & Nikolaus P. Himmelmann (eds.) *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 562-589. Oxford: Routledge.
- Ladefoged, Peter (2005) *Vowels and consonants* (2nd edn.). Oxford: Blackwell.
- 上野善道 (2008) 「母は昔はパパだった、の言語学」大津由紀雄 (編) 『ことばの宇宙への旅立ち』 31-72. 東京: ひつじ書房.
- 上代語辞典編修委員会 (編) (1967) 『時代別国語大辞典上代編』 東京: 三省堂.
- 新村出 (編) (1998) 『広辞苑第五版』 東京: 岩波書店.
- 高山林太郎 (2011) 「岡山県妹尾方言における両唇ふるえ音」『日本方言研究会第92回研究発表会発表原稿集』 27-34. 口頭発表, 甲南大学, 2011年5月27日.
- 高山林太郎 (2012) 「伝承童謡ニラメッコの表現と歴史」『国際児童文学館紀要』 25: 1-14. 大阪: 財団法人大阪国際児童文学館.
- 高山林太郎 (2013) 「情的意味を表わすふるえ音・吸着音の日本列島周辺における分布」『第27回日本音声学会全国大会予稿集』 23-28. 口頭発表, 金沢大学, 2013年9月28日.
- 高山林太郎 (2017) 「語用論的意味の持つ多様な分かり易さ」『東京大学言語学論集 (TULIP)』 38: 375-382. 東京: 東京大学言語学研究室.
- 友定賢治 (編) (1997) 『全国幼児語辞典』 東京: 東京堂出版.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2002) 『日本国語大辞典第二版』 東京: 小学館.
- 日本放送協会 (編) (1957) 『NHK 学校放送小学校楽譜集低学年用第二集 (初版)』 東京: 日本放送出版協会.

高山 林太郎

日本放送協会（編）（1959）『NHK 学校放送小学校楽譜集低学年用第二集（二版）』東京：日本放送出版協会。

服部四郎（1984）『音声学 カセットテープ，同テキスト付』東京：岩波書店。

虫明吉治郎（1982）「岡山県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 8 中国四国地方の方言』59-101. 東京：国書刊行会。

Trills, Clicks, and Pouts in the Japanese Archipelago

TAKAYAMA Rintaro

takayama_rintaro@nifty.com

Keywords: trills, clicks, pouts, interjection phones, Japanese, Korean, Chinese

Abstract

Building on previous studies on trills, clicks, and pouts, this paper presents my own research on interjection phones (such as “[b̥u:], [!!!!...], [!], [p::]”) and ideophones in the Japanese archipelago and a few surrounding areas confirming that they are customarily used in these areas.

(たかやま・りんたろう 東京福祉大学特任講師，
帝京平成大学・武蔵野大学大学院非常勤講師)